

何処にも行き場のない人々のためのホスピス・ケア施設「きぼうのいえ」が、昨年十月東京都台東区の山谷地区にオープンしました。施設を運営しているのは、NPO「山谷・すみだリバーサイド支援機構」です。この運動を企画した施設長の山本雅基さんにお話を伺いました。

活動

「きぼうのいえ」は、四階建て、二十一部屋。全室が個室で、冷暖房やナースコールの設備があります。余命を告知されている人や、全盲、脳梗塞の麻痺が残っている人など、一人暮らしが困難で介護を必要とする人が暮らしています。

隣の「なかよしハウス」と合わせ、施設というより「わが家」であり、関わっている職員やボランティアは皆、家族であり友人となります。

山本さんご自身はクリスチャンですが、仏教の僧侶など、宗教に関係なく色々な方が協力して仕事をしています。

現状のホスピスではなかなかボランティアを受け入れにくいという傾向がありますが、ここではボランティアが各部屋を回り、安否の確認もかねて、お掃除やリネン交換をしながら入居者と顔を合わせしてお相手をします。また、散歩や図書館、レンタルビデオ屋さん、時には喫茶店に同行したりと、その人その人の気持ちに応じて付き合っています。

山谷を選んだ理由

看護師の夫人と結婚式の二日後に、山谷にやってきたという山本さんは、この場所を選んだことに「気分が入ったつもりはない。好きなコーヒーを飲み、好きなクラシック音楽を聞きながら、おじさんたちと接している。その人なりの生き方で、その人の流儀を認め合う」、「居場所に制限されたり、相手に振り回されたりするのは、逆に失礼ではないでしょうか」と言います。

この人たちは、自分の悩みや苦しみをあまり語るうとはしません。悩みが深くなればなるほど、言

葉も出なくなってしまうからでしょうか。語れないからこそ、ついには自分が悩みの塊のようになってしまう。そういう人たちに私たちができることは、ただ寄り添い、声にならない叫びに精一杯耳を傾けること。この世の終りに向かって走り抜いてもらうためのお手伝いをするだけです。

またここにはキャンセルで身を費やし、家庭を壊し、妻子を泣かせた人もいます。「何故そんな人のために？」とも言われます。でも人を裁くのは、私たちの仕事ではないと思っています。生まれてきて良かったとの思いを胸に、旅立ちをしてもらえたらという思いと、人生の舞台を終えた役者に拍手を贈る気持ちです。

看取るということ

看取りの過程では、自分の死生観が厳しく問われているのをひしひしと感じます。以前危篤の人に寝るの番をして、へとへとになってしまったことがあるのですが、看取りをお願いしている往診の先生に「それは君、違うよ。昨夜は元気だった人が、朝、見に行くと静かに亡くなっていった。安らかな顔をして息を引き取ってもらえたら、それが最高の看取りです」と教えていただきました。そう聞いた時に、しゃかりきになっていた気持ちが随分楽になりました。自分は人を救えるかといったら、当然そんなことはできません。山谷に来て先生などと呼ばれて、知らないうちに救済者症候群になってしまったらもうおしまいなのです。

祈り

「きぼうのいえ」を単に雨露をしのげるだけの社会福祉施設にしたくありません。私はここでは人が本来持っている宗教性を思いきり表にだしても良いと思っています。朝のミーティングの前に、私たちは入居者のため、自分たちのため、そしてすべての人のために沈黙します。それが宗教の違い、または信仰のあるなしを越えた、「きぼうのいえ」の祈りの姿なのです。